

流行性肝炎の遠隔成績

第 3 報

和気郡香登町の流行について

岡山大学医学部第一内科教室（主任：山岡教授）

助教授 小坂淳夫
 瀬戸桂太郎
 長島秀夫
 細川簡
 荻野重美
 岩原正雄
 尼子隆士
 庵谷恒夫
 前峠忠義
 中土井芳夫
 川口正光
 竹田嘉男

岡山県衛生部公衆衛生課
 石田立夫

〔昭和34年4月3日受稿〕

緒 言

流行性肝炎の予後に就ては異論が多く、その予後
 を軽視する向もあるが、多くは外国での成績に基く
 発言であつて、詳細な検討はわが国では殆んど行わ
 れていない。著者らは重症例の多発した赤磐郡熊山
 町及び軽症不全型の流行をみた上房郡吉川村におけ
 る遠隔成績を報告し、流行性肝炎の予後は樂觀を許
 さないことを確認したが、更に今回は和気郡香登町
 における遠隔成績を検討しえたので報告する。

検 索 方 法

罹患後臨床治癒と診定され、又は自覚症消失し患
 者自身治癒したと考えた例で、爾後1年を経過した
 81例に就き検討した。検索は昭和30年9月29日に行
 つた。検索方法は既に行つた著者らの方法を採用し
 た。

検 索 地 の 概 要

検索地岡山県和気郡香登町は県の東南部に当り、
 昭和29年当初より主として流行し、9月末迄194名
 の患者発生し、昭和30年に入り再び新患者の散発を
 みている。詳細は別に報告した疫学調査成績に譲る
 が、軽症不全型（胃腸一部感冒型）が主であつた。

検 索 成 績 並 に 考 按

1. 自覚症

自覚症を訴えるものは33例（40.7%）で、主とし
 て発病時の訴えと一致した。この成績は上房郡吉川
 村における率より高い。

2. 理学的所見

2.1. 肝腫

35例（43.2%）に認められ、その触知状態は第1
 表の通りである。この触知率も亦吉川村の例より高

第1表 肝腫

肝腫の程度	解知例	例
1/2 横指		7
1 "		16
1 1/2 "		7
2 "		5
3 "		/
計		35
觸知率		43.2%

率であり、肝腫は可成り長く残存していることを知る。

2.2. 脾腫

触知しうるもの2例(2.5%)、脾濁音界の拡大あるもの10例(12.3%)計12例(14.8%)となり、吉川村の例よりやや少ないが、本流行地でも可成りの未治癒例の存在を推定出来る。

3. 肝機能検査成績

その成績は第2表の通りである。即ち各検査成績

第2表 肝機能検査成績

肝機能	陽性例	陽性率
尿 Urobilinogen	13	16.5%
血清 thymol 濁	11	13.6
Cephalin-cholesterol 絮状	15	18.5
塩化 Cobalt	8	9.9
bilirubin 量	7	8.6

では陽性率8.6~18.5%を示し、而も各検査間に多少の解離をも示している。従つて本流行例に於ても可成りの肝障害を残していることとなる。特に視診上黄疸を残すものは1例も認めなかつたに拘らず、微量過 bilirubin 血を認めたものは7例(8.6%)で、その中他の肝機能障害を認めなかつたものは5例(6.2%)であつた。処で流行性肝炎恢復期微量過 bilirubin 血のみを残す場合、H. Kalk, 等は肝炎後の過 bilirubin 血症と名付け、bilirubin の肝細胞排泄抑制によるものと推定している。著者らの例に就ては更に詳細な検索を行つていないので、その発生病理に就ては不明であるが、H. Kalk, らの述べた症例に一致するものと思われる。

4. 総合判定

以上の諸所見を総合してみると、肝障害が尚残り、

加療を要するものと認めたもの21例(25.9%)、多少の肝障害を残し爾後の経過に注意を要するものと認めたもの4例(3.7%)で、赤磐郡熊山町でえた成績よりは低率であるが、上房郡吉川村の成績より要加療例が多く、要加療例と要注意例を併せると略々1/3に達し、本流行地においても完全治癒が可成り困難であつたことが分る。更に自覚症の有無と肝障害の有無との関係を見ると、第3表の如くで、そ

第3表 自覚症と治癒

自覚症	アリ	ナシ	計
未治	13	8	21
治	20	40	60
計	33 (40.7%)	48	81

の中肝障害を証明せず自覚症のみを訴えた例を20例(24.7%)に認められた。これらは一応肝炎後症候群に属すべきもので、先に吉川村の例で検討した如く、之を直に精神々経症とは考えないで、要注意群と同様に考え、爾後の経過を観察するのが妥当と思われる。そうであれば要注意例は更に増加することとなる。

次に被検例を年齢別、性別に分け、治癒状態を検討してみると、第4表の如く、未治癒例は女性に圧

第4表 年齢、性と治癒との関係

年齢	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~	計
男	1	4 (2)	4 (2)	12 (3)	8 (3)	3	2 34 (7)
女	1	6 (1)	12 (3)	9 (6)	13 (3)	5 (1)	1 47 (14)
計	2	10 (1)	16 (5)	21 (8)	21 (6)	8 (1)	3 81 (21)

備考。() 中は未治癒例。

倒的に多く、特に30才代に多かつた。このことは徹底した安静、治療が望み難い社会的環境と関係がある様である。

結 論

軽症不全型の流行性肝炎の流行をみた岡山県和気郡香登町において、治癒と診定乃至治療を中止し1年を経過した81例の精密検査を実施し、次の結果をえた。

1. 自覚症を訴えるもの33例(40.7%)で、主として発病時の訴えに一致した。

2. 肝腫35例(43.2%)、脾腫12例(14.8%)を

認めた。

3. 肝機能検査により8.6~18.5%の陽性成績をえた。又微量過 bilirubin 血のみを残すもの5例(6.2%)を認めた。

4. 以上の成績を総合すると、要加療のもの21例(25.9%)、要注意のもの4例(3.7%)となる。又肝障害を証明せず自覚症のみを訴える例を他に20例(24.7%)に認めた。

5. 斯くて本症が治癒困難な疾患であるとの概念

は、本流行地の成績からも痛感した。

6. 本流行地では未治癒例は女性に多く、特に30才代に多かつた。

主 要 文 献

- | | |
|---|---|
| 1) 小坂他：岡山医学会誌，66，(1954) 2379 | 308 |
| 2) 小坂他：東京医事新誌，掲載予定。 | 7) Wildhirt, E. · Acta Hepatologica 3, (1956) |
| 3) 小坂他：東京医事新誌，掲載予定。 | 157 |
| 4) 小坂他：岡山医学会誌，66，(1954) 2363 | 8) Sherlock, S. P. V. & Walsche, V. S. · Lancet |
| 5) 石田：日本公衆衛生雑誌，3，(1956) 7号別冊 | 2, (1946) 482 |
| 6) Kalk, H. : Dtsch. med. Wschr. 72, (1947) | 9) 小坂：日本伝染病学会誌，28, (1954) 345 |

Studies on the Remote Results of Epidemic Hepatitis
Report III On the Prevalence of Epidemic Hepatitis
at Kagato-Cho, Wake-Gun, Okayama

By

The First Department of Internal Medicine Okayama University, Medical School

(Director : Prof. K. Yamaoka)

Assistant Professor : Kiyowo Kosaka

Keitaro Seto

Hideo Nagashima

Tsutomu Hosokawa

Shigemi Ogino

Masao Iwahara

Takashi amako

Tsuneo Yoriya

Tadayoshi Maesako

Yoshio Nakadoi

Masamitsu Kawaguchi

Yoshio Takeda

The Public Health Department of Okayama Prefectural Hygiene Center

Tatsuo Ishida

Conclusions

The complete examination was done on the 81 cases, passed for 1 year after the release of treatment under the diagnosis of recovery or after the suspension of treatment at Kagato-Cho, Wake-Gun, Okayama in where there were the prevalence of slight abortive form of epidemic hepatitis.

1. The cases remaining of subjective symptom were 33 (40.7 %) and their complaints were mainly same to those on the course of disease.

2. Hepatomegaly in 35 cases (43.2 %) and splenomegaly in 12 cases (14.8 %) were observed.

3. The cases showing a positive liver function test were 8.6—18.5 % and the cases showing only a slight increasion of serum bilirubin were 5 (6.2 %).

4. Since the above results, the cases required of treatment were 21 (25.9 %), the cases required of care 4 (3.7 %). On the other hand, the cases having only subjective symptom without any evidences of liver damage were 20 (24.7 %) on the addition of the above cases.

5. The concept, the recovery of epicemic hepatitis was difficult, was supported with the above results in the epidemic area.

6. In this epidemic district, the unrecovered cases were manily observed on female, especially female in the third decade.
